

指導資料



鹿児島県総合教育センター

社会 第113号

- 小学校，特別支援学校対象 -

平成22年4月発行

問題解決的な学習の一層の充実を図る小学校社会科の基本的な指導の進め方

平成20年3月に告示された新学習指導要領には，小学校社会科の改善の具体的事項として，「問題解決的な学習などを一層充実させることで，知識・技能の習得と言語活動の充実を図る。」と明記してある。問題解決的な学習とは，自ら課題を見つけ，自ら学び，自ら考え，主体的に判断し，問題を解決する学習であり，これは，新学習指導要領が目指す「生きる力」の理念につながる学習と言える。

さて，平成19年にベネッセ教育研究開発センターが，教師を対象に実施した「第4回学習調査」では，社会科は，「指導の得意・苦手な教科」の項目で，「どちらかという苦手・苦手」の割合が，全体の過半数を超える結果となった。また，平成17年に，小学生を対象に文部科学省が実施した「義務教育に関する意識調査」では，第4学年，第5学年ともに，「教科等の好き嫌い」の質問項目において，「とても好き・まあ好き」の合計が，社会科は，全教科・領域の中で，最下位の結果であった。社会科指導における教師の苦手意識が子どもの社会科に対する苦手意識に関連があることが推察できる。

そこで本稿では，新学習指導要領の趣旨を踏まえ，問題解決的な学習を一層充実させる

ためには，まずは教師がその指導法を身に付けることが大切であると考え，小学校社会科の基本的な指導の進め方について述べる。

社会科指導の基本的な進め方

社会科指導の基本的な進め方を，次の2つの観点でとらえた。

- ・ 指導過程の基本的な進め方のポイントが分かる。
- ・ 教科書を効果的に活用して，地域素材を取り入れた学習指導ができる。

- 1 指導過程の基本的な進め方のポイント
問題解決的な学習の基本として，次のような指導過程の進め方を，教師が身に付けることが重要となる。

〔指導過程の基本的な進め方〕

- (1) つかむ (学習課題の提示)
- (2) 立てる (追究の柱づくり)
- (3) 調べる (調べる活動)
- (4) まとめる (まとめる活動)
- (5) 広げる (課題追究の深化・発展)

- (1) 「つかむ」段階のポイント

単元全体を通して問題解決的な学習を進める上で，子どもたちの問題意識を喚起し，持続させるかが大きなポイントとなる。そのためには，学習の導入段階での効果的な資料提示が重要と

なる。

導入段階での効果的な資料提示については、次の3つの視点が大切となる。

〔指導資料社会第110号（平成20年）参照〕

- ア 「不思議だな」「なぜかな」「どうしてかな」など問題意識を高めさせる資料を提示する。
- イ 対照的に比較できる資料を提示する。
- ウ 変化や変遷の理由を考えさせる資料を提示する。

例えば、次のような提示が考えられる。

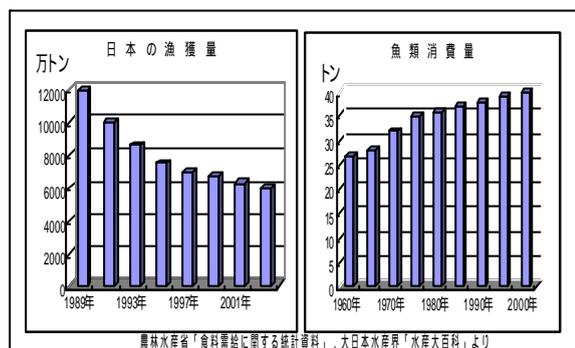


図1 日本の漁獲量と魚類消費量の推移を示すグラフ

これは、日本の漁獲量と魚類消費量の推移を表したグラフである。この資料を提示すると、「漁獲量は年々減ってきているのに、なぜ、魚類の消費量は年々増えているのだろうか。」という疑問が当然湧いてくる。この「なぜだろう?」と言う問題意識が、「つかむ」段階での学習問題づくりにつながっていく。

(2) 「立てる」段階のポイント

ここは、単元全体の追究の柱を立てる過程である。「つかむ」段階で喚起された学習問題について、どのように解決していけばよいか、問題解決に向けた追究の柱づくりになる。

指導過程では、学習問題に対する子どもたちの予想を類型化して、追究の柱を立てさせる。類型化する際は、KJ法な

どの考え方を取り入れると効果的である。

例えば、前述した「漁獲量は年々減ってきているのに、なぜ、魚類の消費量は年々増えているのだろうか。」という学習問題に対する追究の柱づくりを下記のようにイメージで表してみた。

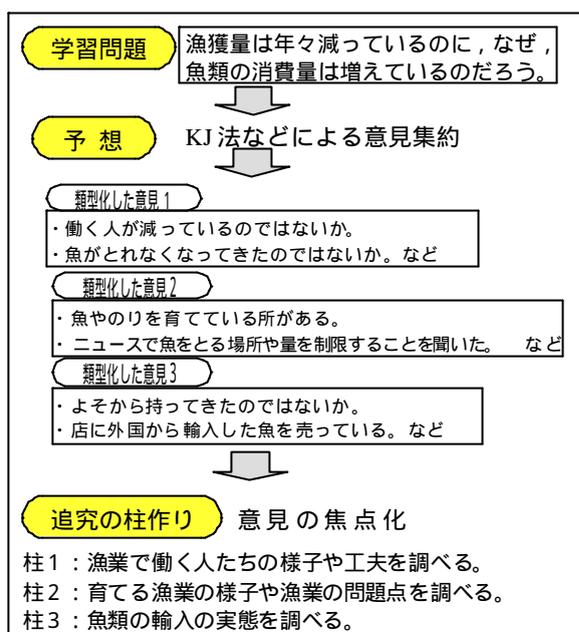


図2 追究の柱づくりのイメージ

(3) 「調べる」段階のポイント

ここは、追究の柱を調べる過程である。調べる方法としては、次のように様々な方法がある。

- ア 文字情報（教書、資料集、副読本、新聞等）
- イ 体験活動（見学、聞き取り、手紙、操作種等）
- ウ 通信情報（インターネット、テレビ、ラジオ等）

調べる活動では、実際に見学したり、聞き取りをしたりする体験的な活動が、実感して納得できる方法ではあるが、教材や学年によっては、それが難しい場合があり、文字情報や通信情報を基に調べることになる。

そこで留意することは、それらの情報が、子どもたちが理解できる情報である

かということである。あふれる情報の中から、最適な情報を取捨選択して追究に生かす方法を押さえることが大切になる。

〔調べ学習の指導で留意すること〕
 ア 何をどのように調べればよいか事前に確認する。
 イ 身近な、教科書、資料集、副読本を基本に調べさせる。
 ウ 文字情報や通信情報は、参考になる資料や Web サイトを事前にチェックしておく。
 エ 施設利用の手順やマナーを確認させる。
 オ 資料をそのまま書き写すのではなく、項目ごとに箇条書きでまとめさせる。
 カ 欲しい情報は、電話や手紙を使うと有効に収集できることを体験させる。

(4) 「まとめる」段階のポイント

ここは、調べたことをまとめる過程である。まとめ方としては、次のような方法がある。

ア 文字や絵を使って
 (新聞、レポート、ポスター、紙芝居、作文等)
 イ 映像を使って
 (ビデオ、プレゼンテーション等)
 ウ 表現活動で(口頭発表、劇等)

まとめる活動では、次のことを留意したい。

〔まとめる活動の指導で留意すること〕
 ア 決められた時間内でまとめさせる。
 イ 学習問題や追究の柱に基づいてまとめさせる。
 ウ グループでまとめる際は、役割や紙面構成の分担を決めて、効率的・効果的に取り組ませる。
 エ まとめた成果は、発表、展示などで発信させる。

(5) 「広げる」段階のポイント

ここは課題追究の深化・発展を図る過程である。学習課題を追究する中で、新たな疑問や課題が生まれ、さらに追究しようとしたり、学習した成果を広く発信しようとしたりする意識や意欲が生まれる。

社会的な見方・考え方はくぐみ、社会と関わり合う姿勢を大切にする教科の特質を考えた時、大切な活動と言える。

広げる活動では、次のことを留意したい。

〔広げる活動の指導で留意すること〕
 ア 指導過程の中に、疑問に思ったことや、もっと調べたいことなどをくみ取る活動を位置付ける。
 イ 時数や内容を考慮して、他教科・領域や、家庭学習との関連を図る。

2 教科書の効果的な活用

教科書で取り扱う素材は、国内の特徴的な地域を取り上げるため、子どもたちの身近な地域素材ではないが、各単元の目標や内容に沿った教材の取扱い方、指導過程の考え方や進め方などは、授業づくりにおいて参考になる(図3)。

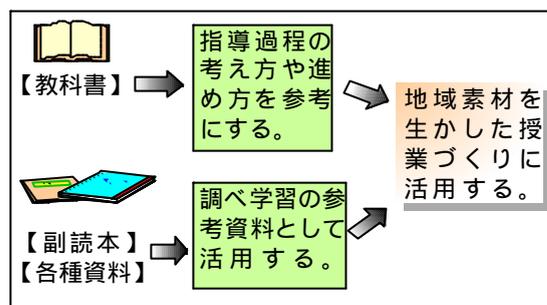


図3 教科書・副読本などの活用イメージ

例えば、第5学年の農業分野において、教科書(東京書籍「新編新しい社会5上」)では、新潟県の庄内平野の米作りを取り上げている。代表的な米作り地域の学習内容を通して、米作り農家の工夫や努力など、生産や流通に関する学習内容を指導する単元である。

その際、この単元の指導過程を基に、学習問題の提示の仕方や学習問題の作り方、学習計画の立て方や追究の仕方、学習成果のまとめ方などを参考にすることで、身近な地域素材の教材化に生かすことができる(図4)。

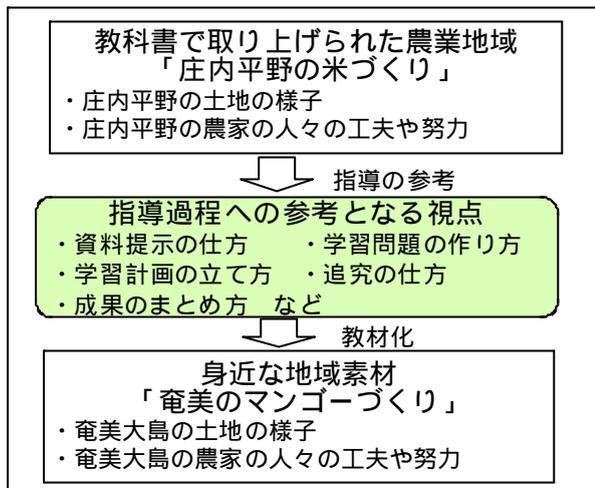


図4 教科書の効果的な活用例1

教科書の指導過程を参考に、「指導の手引」として活用する以外に、教科書の代表的な素材を基に、指導の後、身近な地域素材を学習の発展、応用として子どもたちに取り組ませる「学習の手引」として活用を図ることができる。

また、身近な地域素材を教材化して単元指導を行った後、教科書における他地域の農業の様子と比較することで、違いや共通性を見だし、農業に従事している人々の工夫や努力、私たちの生活との関連をおさえさせる「社会的事象の一般化」を図ることができる（図5）。

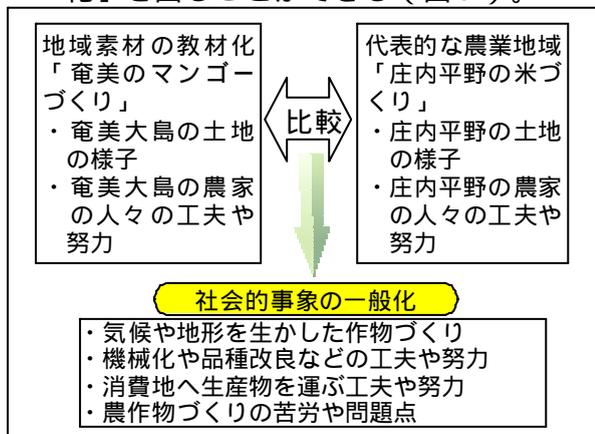


図5 教科書の効果的な活用例2

ここでの留意点として、教科書を活用する場面や時数の精選と指導内容の重点化など、指導計画への位置付けを工夫することが肝要になる。

また、教科書には、図6のように、「まなび方コーナー」や社会科の重要語句、資料活用としての各種データなどが掲載されている。問題解決的な学習を進める中でこれらを活用し、基本的な社会的事象の理解を図ることは大切な指導であり、教室掲示資料としても活用を図りたい。

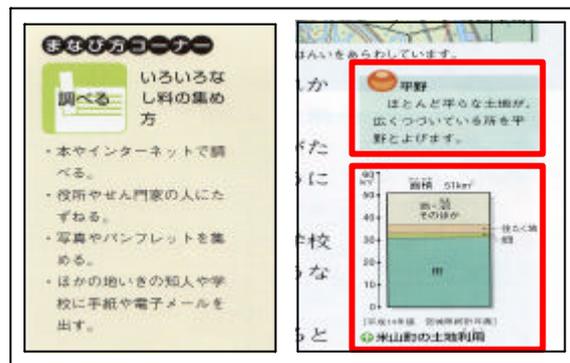


図6 教科書の効果的な活用例3 東京書籍「新編新しい社会」より

このように、社会科指導において、教師の苦手意識を克服するためには、問題解決的な学習を充実し、指導過程の基本的な進め方のポイントをおさえ、教科書を効果的に活用して地域素材を取り入れた指導を行うことが重要であると考えられる。そのことが、子どもたちの苦手意識の克服と生きる力の育成につながることを期待する。

【参考文献等】

『義務教育に関する意識調査』 H17.6 文部科学省
 『第4回学習指導基本調査』 H19.8 ベネッセ教育研究開発センター
 北俊夫著『新教育課程と社会科の授業構想』 H20.8 東洋館出版 H20 明治図書
 『指導資料社会第110号』 H20.10 鹿児島県総合教育センター
 * KJ法：文化人類学者、故川喜田二郎氏(1920-2009)が考案した発想整理法の一つで、多様な発想を整理し、問題解決のアイデアを引き出すための手法である。

(企画課)